

令和6年度 学校評価総括表

奈良県立大学附属高等学校

奈良県立大学建学の精神	奈良の再発見を通して日本と世界に貢献する		
教育目標	地域社会及び国際社会で活躍する人間を育てる		総合評価
学校経営方針	自立した個人として他者や社会に貢献し、何事にも挑戦する姿勢を確立する		
昨年度の成果と課題	本年度重点目標	具体目標	
<p>本校教育の特色である、アカデミックスキルの基礎を学びつつ生徒自身が設定した課題に取り組む「課題探究」、反転学習を前提とする「アクティブ・ラーニング型授業」の全教科での導入、一人一台の情報端末を活用した「ICT活用教育」等に積極的に取り組んだ。また、生徒には、「自立」した個人として、他者や社会に「貢献」し、何事にも「挑戦」することを求め、これを生徒綱領(自立、貢献、挑戦)として示した。在校生の多くは、これらを理解し、自ら学ぶ姿勢が醸成され、様々なことに興味をもち積極的に挑戦する本校生の特徴が定着してきた。</p> <p>令和6年度入学選抜では、前年度より230名減の365名が受検し、174名が第三期生として入学した。今後は、本校の教育方針に適合する受検生の安定的確保を継続させることが課題である。また、今年度末に卒業を迎える1期生の多様な進路希望を実現できるよう全職員が取組を進めていく必要がある。</p>	<p>本年度は、昨年度の各具体的目標の実績を踏まえ、教職員と生徒が一体となって学校づくりを進めていくことを本校教育のねらいとして位置付け、生徒たちに対しては、「学習活動」「学校行事」「部活動・生徒会活動」等のあらゆる場面で「自立」「貢献」「挑戦」の3つのキーワードを意識し、実践することを通して、変化の激しい不確実な時代をたくましく生き抜く力を身に付けるよう指導する。具体的には、</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">1. 自らの意思で主体的に行動し、責任をもつ姿勢を確立すること</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">2. 他者や社会への関心をもち、課題解決のために自らの能力を発揮する姿勢を確立すること</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">3. 失敗を恐れず、新たなことや困難な課題に果敢に挑戦する姿勢を確立すること</div> <p>を、引き続き自らの目標として設定させる。 また、</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">4. 「学び続ける教員」としての自覚と実践</div> <p>をキーワードに据え、教えることと並行し学ぶことの専門家であることを自覚し、実践することで、生徒に学ぶ喜びを伝えられるよう研修を充実させ、積極的に参加するよう努める。また、生徒の主体的・協働的な学びをさらに充実させ、全ての授業において反転学習を導入し、平常の授業では情報端末を効果的に使用しながら、アクティブ・ラーニングの手法を用いた授業を積極的に導入するよう努める。また、観点別評価を積極的に行う。</p> <p>次に、</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">5. 本校の教育活動の様子を積極的に発信し、その魅力を広く伝えることに努める</div> <p>こととし、各重点目標に関して、右記の具体的目標掲げる。 なお、その成果については、各種アンケートの結果などを判断指標として用い、達成度・満足度などを把握する。</p>	<p>①「生徒会」の活動を、学校行事等の計画・実施に主体的に関われるようにするなど、生徒が気力・体力・知力の充実した主体的な活動を送れるような場と機会を提供する。</p> <p>②生徒が受動から主体となるよう授業や活動等の工夫を進め、また、そのための支援体制をつくる。</p> <p>①社会的課題への関心をもち、社会の構成者（主権者）としての素養を醸成する。</p> <p>②地域との連携を強化し、「協働」を進め、地域に「貢献」することの意義を確認できるよう、様々な体験活動を充実させる。</p> <p>①学校行事の意義を認識させ、主体的な参加姿勢を培うとともに、「挑戦」することの大切さを認識させ、問題解決能力を養うよう努める。</p> <p>②社会的自立を見通した進路選択を意識することで、学びに向かう意欲を醸成する。ライフキャリア教育等を充実させる。</p> <p>①教職員の研修体制を民間を活用するなど刷新し、充実した学びを構築する。</p> <p>①各種メディアを積極的に活用し、多角的に本校の魅力を多方面に周知する。</p> <p>②学校評議員会での評価を活性化する。</p>	B

	具体的目標	具体的方策・評価指標【】の番号は重点目標-具体的目標に対応する	自己評価結果	成果と課題(評価結果の分析)	改善方策等	学校関係者評価(結果・分析)及び改善方
(1) 学習支援	①生徒が主体となり取り組める魅力ある授業づくりを推進する。	生徒が主体となる学習を推進し、授業に集中して取り組めるよう支援する。生徒の授業アンケートにおけるアクティブ・ラーニング型授業の満足度が70%以上でA、50%以下でC。【1-②】	A	「自ら考え活動して学ぶ学習に満足している」に肯定的な回答が89.1%であり、かつ、主体的に取り組むことができているとの回答も90.8%と高い数値であった。また、より肯定的に評価する生徒(3より4)の割合も向上した。	アクティブ・ラーニング型授業は生徒と教員相互の協力によって実現するものであり、肯定的な数値の上昇は開校3年を終えた本校教育の成果だと考える。一方、情報端末を活用した学習は数値的には満足できるレベルに達しているが、効果的な自学自習の推進・改善に工夫が必要である。	アクティブ・ラーニング型授業に肯定的な数値が上昇しているのは評価できる。効果的な自学自習の推進・改善に工夫が必要である。
	②各種教材・教具の適切な活用を図り、家庭学習を重視した主体的な学びを実現する。	学校での学習とともに、ICT教材の活用による家庭学習を重視させる。生徒の授業アンケートにおいて、ICTを活用した学習に主体的に取り組むことができた生徒が70%以上でA、50%以下でC。【1-②】	A	「情報端末を活用した学習は効果的だと感じている」に肯定的な回答が86.2%、また、「高校入塾後、自学自習の習慣が身に付いた」に肯定的な回答が73.7%であった。前者は昨年度から3.2ポイント減少したが、後者は13.2ポイント上昇した。	早期、放課後、休日(年間68日)の自習室環境を整え、利用を啓発することで、自習室を利用する生徒が増えた。生徒アンケート結果で、自学自習の習慣が身に付いた生徒が73.7%であり、昨年度の60.5%から大きく上昇した。	自習室を最大限開放し自主的に学習できる環境を提供できたことは評価できる。進路実現に向けて適切に学習計画を立てられるよう取組が求められる。
(2) 進路支援キャリア教育	①生徒の進路第一希望の実現のために、自学自習の習慣を身に付けさせる。	早期、放課後、休日(年間68日)の自習室環境を整備する。また、学年別に学習研修会を定期的に行い、教科との連携をはかる。学習教材を有効に活用し、学習記録等、進路実現を見据えた学習計画を立て、自学自習の習慣を身に付けさせる。生徒アンケートで、自学自習の習慣が身に付いた生徒が70%以上でA、50%以下でC。【1-②】【3-②】	A	早期、放課後、休日(年間68日)の自習室環境を整え、利用を啓発することで、自習室を利用する生徒が増えた。生徒アンケート結果で、自学自習の習慣が身に付いた生徒が73.7%であり、昨年度の60.5%から大きく上昇した。	早期、放課後、休日(年間68日)の自習室環境を整え、利用を啓発することで、自習室を利用する生徒が増えた。生徒アンケート結果で、自学自習の習慣が身に付いた生徒が73.7%であり、昨年度の60.5%から大きく上昇した。	自習室を最大限開放し自主的に学習できる環境を提供できたことは評価できる。進路実現に向けて適切に学習計画を立てられるよう取組が求められる。
	②ライフキャリア教育を促進する。	自己実現のためのホームルー、ライフキャリア育成プログラム、各授業等を通して、自己の将来について考えさせる。学年末の生徒アンケートでキャリア教育・進路情報の満足度が70%以上でA、50%以下でC。【1-②】【2-①】【3-②】	A	キャリア教育を通して、自己の将来について考えさせ、進路実現へ向けて、多くの進路情報を発信した。生徒アンケートの結果で、キャリア教育・進路情報の満足度が82.2%であり、昨年度の70.7%から大きく上昇した。	標準服の着こなしや学校生活のさまざまな具体的な場面について、95.2%の回答があった。昨年度同様、高い数値であった。画一的な指導に依らず、頭髪や服装については式典を契機として、生徒自身の主体的な判断と自律的な行動がなされている。遅刻・欠席が多い状態が続いていることは今後の課題である。	生徒の自主性を大いに自律的な行動を意識するよう取り組ませていることは評価できる。学校行事や生徒会活動の一層の充実に向けての工夫が必要である。
(3) 生徒支援生徒会活動	①基本的な生活習慣の確立と規範意識の向上を図り、自律的な学校生活を目指す。	日常のさまざまな場面で主体的・自律的に行動できる生徒を育てる。時間の意識、他者を気遣った言葉づかい、交通指導の指導を徹底する。生徒アンケートで「時間や身だしなみについて、自律的に判断して行動している」と回答する生徒が70%以上でA、50%以下でC。【1-②】【2-①】	A	生徒アンケートの「時間や身だしなみについて、自律的に判断して行動している」と回答する生徒が70%以上でA、50%以下でC。【1-②】【2-①】	標準服の着こなしや学校生活のさまざまな具体的な場面について、95.2%の回答があった。昨年度同様、高い数値であった。画一的な指導に依らず、頭髪や服装については式典を契機として、生徒自身の主体的な判断と自律的な行動がなされている。遅刻・欠席が多い状態が続いていることは今後の課題である。	生徒の自主性を大いに自律的な行動を意識するよう取り組ませていることは評価できる。学校行事や生徒会活動の一層の充実に向けての工夫が必要である。
	②生徒会活動の活性化を図り、部活動や学校行事へ主体的に参加させる。	生徒会が中心となり、生徒が積極的に部活動や学校行事に参加できる取組の企画を促す。学年末の生徒アンケートで、学校行事の満足度が70%以上でA、50%以下でC。【1-①】【2-②】【3-①】	A	生徒アンケートの「本校の学校行事や生徒会活動は充実している」の回答が「とてもそう思う」「そう思う」を合わせて74.6%で、昨年度の71.6%から微増した。生徒会が主体となり、自宝箱の設置や専門委員会の活性化等を今年度も進めることができた。生徒会の取り組みをより周知すること、専門委員会の役割分担をより明確にすることが課題である。	標準服の着こなしや学校生活のさまざまな具体的な場面について、95.2%の回答があった。昨年度同様、高い数値であった。画一的な指導に依らず、頭髪や服装については式典を契機として、生徒自身の主体的な判断と自律的な行動がなされている。遅刻・欠席が多い状態が続いていることは今後の課題である。	生徒の自主性を大いに自律的な行動を意識するよう取り組ませていることは評価できる。学校行事や生徒会活動の一層の充実に向けての工夫が必要である。
(4) 人権教育特別支援教育教育相談	①生徒一人ひとりが自分の人権を守り、他人の人権を守ろうとする意識を高め、人権を尊重する主体的な態度を育てる。	生徒一人ひとりの人権意識を高めるため、「人権だより」の発行を行う(年3回)。いじめを生まない、ゆるぎない環境作りを積極的に伝える生徒を育てるため、生徒によるいじめ防止活動を行う。人権教育HRで生徒の身近なテーマを取り上げ、人権尊重の意識を育てる。生徒アンケートで「人権意識が高まった」「自分・他人の人権を大切にしようと思う」と回答する生徒が70パーセント以上でA、50%以下でC。【1-②】	A	「人権だより」を年4回発行した。人権委員が主体となって文化祭において啓発活動を行った。人権教育HRでは、1学年は「互いの思い、考えを認め合う学習」、2学年は「身近な人権問題についての学習」、3学年は「進路に関わる人権学習」を行い、人権意識を高めることができた。生徒アンケートで「人権意識が高まった」「自分・他人の人権を大切にしようと思う」と回答する生徒が98.3%であった。	人権学習HRの回数を増やし、充実させる。そのためには、HRの時間の調整が必要である。 ・人権委員の啓発活動をさらに発展させていく。 ・関係職員やスクールカウンセラー、必要な場合には外部機関とさらに緊密な連携をとる。 ・学年ごとにスクリーニング会議や生徒の情報共有する場をもつ。	様々な支援を必要とする生徒に対して教育相談や特別支援教育等を通して手厚い支援ができたことは評価できる。引き続き、生徒の状況把握に努めることや人権学習HRの充実を図ることが必要である。
	②教育相談や特別支援教育の体系化を図り、学校全体の共通認識のもとに個々に応じた対応を行う。	生徒の困難な状況や支援内容を理解するために、教職員共通理解研修を年2回以上実施する。配慮や支援が必要な生徒には、特別支援教育委員会を開き、支援体制を整える。また、必要に応じて、スクールカウンセラーや外部機関と連携をする。そして、生徒の状況に応じ、スクール会議やケース会議を実施し、生徒に改善や好転が見られたらA、状況の変化が緩やかであったり、経過を観察している状況ではB、変化をもたらすことができなかつたらCとする。【1-②】	B	スクールカウンセラーや外部機関と連携し、生徒の実態・状況把握に努め、1学年20名、2学年13名、3学年13名の相談を受け、職員で共有した。必要に応じて特別支援教育委員会やケース会議で生徒への支援の方向性を検討し、体制を整えた。職員研修は4月と6月の2回実施した。生徒が悩み事を相談する場を常に提供できるよう、平日放課後教育相談室(オレンジルーム)に部員が常駐する体制を整えた。	標準服の着こなしや学校生活のさまざまな具体的な場面について、95.2%の回答があった。昨年度同様、高い数値であった。画一的な指導に依らず、頭髪や服装については式典を契機として、生徒自身の主体的な判断と自律的な行動がなされている。遅刻・欠席が多い状態が続いていることは今後の課題である。	様々な支援を必要とする生徒に対して教育相談や特別支援教育等を通して手厚い支援ができたことは評価できる。引き続き、生徒の状況把握に努めることや人権学習HRの充実を図ることが必要である。
(5) 文化図書教育	①生徒の読書活動を充実し、探究活動や将来に資する力を育成する。	読書の楽しさと意義を実感し、生涯にわたって図書館や読書を自分の人生に活かすことのできる態度を育成する。年度末アンケートで学校図書館と読書についての満足度が70%以上でA、50%以下でC。【2-①】	A	「学校図書館や図書館を使った活動に満足している」に肯定的な回答が79.0%、「図書館の使い方や読書についての指導がためになった」に肯定的な回答が74.4%であった。	アンケート数値は水準に達しているが、読書は探究に関わって教養を下支えする重要な活動であり、教科学習との連携によって一層の向上を目指す必要があると考えている。文化的行事等については、回数的な基準は満たしていないものの制約のある中で活発な活動を進められていると考えている。	引き続き読書活動が探究活動の内容の充実につながるしくみ作りや、図書館の活用が増えるような取組が必要である。
	②文化活動を充実し、生徒の想像力・創造力の育成を目指す。	文化行事をとおして想像力・創造力を育て、社会の一員として必要な文化的素養や教養を育成する。学校全体の取組として、年間4回以上の文化的行事を実施してA、2回以下でC。【2-②、3-①】	B	例年実施の3事業(創立記念行事、学校図書館オリエンテーション、新春かるた大会)を実施することができた。図書館としては、図書館だよりの定期的な発行に加え、図書寄贈への応募、委員会活動による冬季貸出しキャンペーンなどを実施したが行事は実施しなかった。	標準服の着こなしや学校生活のさまざまな具体的な場面について、95.2%の回答があった。昨年度同様、高い数値であった。画一的な指導に依らず、頭髪や服装については式典を契機として、生徒自身の主体的な判断と自律的な行動がなされている。遅刻・欠席が多い状態が続いていることは今後の課題である。	引き続き読書活動が探究活動の内容の充実につながるしくみ作りや、図書館の活用が増えるような取組が必要である。
(6) 環境整備	①生徒が自ら校内を美化する姿勢を養う。	日々の校内清掃活動をおとして、公共物を大切に、過ごしよい環境をつくる意識を高める。学年末の生徒アンケート(校内美化)で、校内を美化する意識が身に付いたが70%以上でA、50%以下でC。【1-①】	A	生徒アンケートの「日々の校内清掃を通して、校内を清掃する意識が身に付いた」の回答が「とてもそう思う」「そう思う」を合わせて83.4%であった。校門前の花壇を充実させる美化活動も取り組むことができた。	引き続き教員と連携を取り活性化をはかる。 ・清掃箇所の割り振りの再点検を行う。	生徒の校内美化意識の高まりは評価できる。教室等の活用状況から清掃箇所を再考する必要がある。
	②大掃除等を行い、校内美化を図る。	環境委員会を中心とした活動を活性化させ、校内大掃除活動を定期的に行う。大掃除活動を年間8回以上でA、5回以下でC。【1-①】【2-②】	A	大掃除活動を年間10回行った。清掃用具の点検と補充を行い清掃活動を充実させた。清掃等の行事前に委員会を開催したことにより、生徒たちの校内美化に対する意識が高くなったと感じる。	標準服の着こなしや学校生活のさまざまな具体的な場面について、95.2%の回答があった。昨年度同様、高い数値であった。画一的な指導に依らず、頭髪や服装については式典を契機として、生徒自身の主体的な判断と自律的な行動がなされている。遅刻・欠席が多い状態が続いていることは今後の課題である。	生徒の校内美化意識の高まりは評価できる。教室等の活用状況から清掃箇所を再考する必要がある。
(7) 健康安全食育・防災教育	①生徒が学校生活に専念できるより健康な生活を送るための生活習慣を確立する。	各種面談、健康調査票や学校保健委員会、定期検診やその事前・事後指導を通して生徒の身体状況、健康状態の共通理解を図る。保健だより、食育だよりをそれぞれ年4回以上発行した場合A、1回以下でC。【1-②】	A	保健だより年間8回、食育だより年間4回の発行であった。検診などの生徒への事前・事後指導を行い、職員の共通理解を行った。保健室との連携をさらに密に行い、日常生活における生徒の状況を理解していく必要がある。	アンケートで、生徒の健康診断の結果を知っている保護者が70%であるので、周知できるよう保護者連絡を行う。広く自然災害全般を意識した避難訓練を計画すること、避難訓練の計画に生徒自身が考えることなど、実際の校外生活に援用しやすい計画を立案する。	心身の健康の保持増進の観点から、食育・学校保健について、引き続き関係機関と連携して取り組む必要がある。防災教育の一層の充実が求められる。
	②火災、震災等に備える取り組みを通して、自らの身を守る行動の習得と防災に対する意識を高める。	火災、震災に備えて、避難訓練およびシェイクアウト訓練を実施する。安全点検を定期的に行うことにより、危険箇所や潜在危険を早期に発見し、事故災害の可能性を除去する。安全点検を年間3回以上行った場合A、1回以下でC。【2-①】	A	火災を想定した避難訓練を5月に行った。緊急地震速報の全国訓練に合わせたシミュレーション訓練を11月に行った。大掃除と組み合わせ定期的な、年間4回の安全点検を行った。	標準服の着こなしや学校生活のさまざまな具体的な場面について、95.2%の回答があった。昨年度同様、高い数値であった。画一的な指導に依らず、頭髪や服装については式典を契機として、生徒自身の主体的な判断と自律的な行動がなされている。遅刻・欠席が多い状態が続いていることは今後の課題である。	心身の健康の保持増進の観点から、食育・学校保健について、引き続き関係機関と連携して取り組む必要がある。防災教育の一層の充実が求められる。
(8) 広報	①中学校・塾等への広報活動を積極的に行う。	生徒主体で本校を紹介するリーフレットを作成し、説明会、県内の施設等で配布する。また、学校説明会を生徒に主体的に運営させる。学校および各施設での説明会実施回数が15回以上でA、5回以下でC。【1-②】【5-①】	B	本校および要請に応じて中学校や塾の説明会等に参加し、生徒、保護者等に説明を行った(13回)。大会場での説明会にも参加し、参加生徒、保護者の総数は1500名を越えた。	中学校や塾の説明会では、本校の他校との違いがよくわかるように工夫する。学校体験会については、実施時期を夏から秋に変更したことが効果的であった。今後も体験会・相談会と異なる形で情報提供に努めたい。また、アンケートの記述でいただいたご意見を参考に改善に努めたい。	生徒が主体となる学校広報活動は、たいへんめざらしく、評価できる。HRの充実を図るなどより一層の広報活動の充実が求められる。
	②学校体験会を実施し、特徴的な本校教育を中学生・保護者に知ってもらう。	後期の前半に学校体験会を行う。できるだけ多くの教科の体験授業を提供し、本校教育に関心をもつ生徒、保護者を増やす。体験会の参加者アンケートで、体験会に満足したと答えた割合が全体の80%以上でA、60%以下でC。【5-①】【5-②】	A	後期前半に学校体験会を実施した。実施する科目を一部見直しながら、より多くの魅力的な授業を実施できるようにした。結果、体験会の満足度に関する肯定的な回答は保護者が94.1%、生徒で98.1%であり、いずれも4段階で4の回答が最も多かった。	標準服の着こなしや学校生活のさまざまな具体的な場面について、95.2%の回答があった。昨年度同様、高い数値であった。画一的な指導に依らず、頭髪や服装については式典を契機として、生徒自身の主体的な判断と自律的な行動がなされている。遅刻・欠席が多い状態が続いていることは今後の課題である。	生徒が主体となる学校広報活動は、たいへんめざらしく、評価できる。HRの充実を図るなどより一層の広報活動の充実が求められる。

	具体的目標	具体的方策・評価指標 【】の番号は重点目標-具体的目標に対応する	自己評価結果	成果と課題(評価結果の分析)	改善方策等	学校関係者評価(結果・分析)及び改善方
(9) 学校運営	①「学び続ける教員」としての自覚と実践を促すための研修を推進する。	教職員が教育研究所等の研修会や教科等の研究会に積極的に参加し、その研修の成果を教職員間で共有できる状況をつくる。校内外の研修会への参加者の割合が70%以上でA、50%以下でC。【4-①】	A	全教科・科目において、教育課程研究会や学習指導研究会に参加した。教員数が増加し昨年度より教員間で意見交換できた。個人情報取扱扱いについての研修も全員受講した。	課題探究の内容について情報交換する。他教科の授業見学をするなどして研修できる機会を増やしたい。保護者のアンケート回答やAIGROWで得たデータの分析を進め、生徒、保護者が求める学校の姿を追究していきたい。	生徒・保護者の本校教育に対する満足度が高く評価できる。アンケートの回答の詳細な分析を進める必要がある。
	②学校と保護者が連携して個々の生徒の成長を促す。	育友会活動と連携し、学校教育に対する保護者満足度を高める。本校の教育に関するアンケート(保護者)で、入学させてよかったと答えた割合が全体の70%以上でA、50%以下でC。【1-②】【5-①】【5-②】	A	本校の教育に関するアンケート(保護者)で、入学させてよかったと答えた割合は94.6%であった。また、入学してよかったと回答した生徒は85.2%であった。		
(10) 研究開発	探究的な学習をとおして社会の課題に関心をもち、自らの未来を切り拓く力を育成する。	探究的な学習を核とした教育課程を編成し、その円滑な実施に向けて立案とサポートを行う。課題探究の学習に対する生徒の満足度(授業アンケートで「わかりやすい」「速さやレベル」の指標の平均)が70%以上でA、50%以下でC。【2-①】	A	生徒アンケートの「わかりやすい」「速さやレベル」の指標の平均は86.3%であった。しかし、「とてもそう思う」と最も肯定的な回答は、肯定的回答の半分にとどまり、満足度と見えた場合非常に高いとまでは言えないと考える。	特に「速さやレベル」の方が低かったことを踏まえて必要な支援を検討していきたい。	探究的な学習が進むよう、全教員で取り組む必要がある。
(11) 1学年	自ら課題を設定し解決しようとする探究活動を通して、自律及び自立の姿勢を身につけることを目指す。	日々の学校生活を通して、自らの夢の具現化を目標とし、それに向かって自らの意思で行動できるようにサポートする。生徒に対する学校生活に関するアンケートにおいて、満足度が70%以上でA、50%以下でC。【1-①】【2-②】【3-①】	A	学校生活に関する生徒アンケートの学年平均値は88.0%となり、満足度は高い。「自分・他者の人権を大切にしよう」と発言・行動しなければいけないと思う」の項目は95.9%あり、自尊感情および仲間意識の涵養が見られる。一方で「風大塾等、学校の施設を学習に利用している」については53.4%にとどまり、主体的に学習に取り組む姿勢が見られない生徒もいることが課題である。	学力向上に意欲的な生徒も多く、情報端末を活用した学習にも意欲的である一面を活かし、より質の高い学び方を示していきたい。キャリア部と連携して学びの時間と場所を提供していく。	学習に意欲的な生徒が今後も質の高い学びができる環境を提供し続けることが求められる。
(12) 2学年	中間学年として、学校の屋台骨的存在になれるように、学校活動により一層主体的に取り組む。	各個人の高校生活の充実をはかり、目標に向かい自らの意思で主体的に行動し、中間学年として後進に範を示す姿勢を確立する。生徒に対する学校生活に関するアンケートにおいて、満足度が70%以上でA、50%以下でC。【1-①】【2-②】【3-①】	A	学校生活に関する生徒アンケートの学年平均値は82.2%であった。学力向上に向けて学校が支援してくれていると感じている生徒は92.9%と多い一方で、高校に入学後自習自習の姿勢が身についたと感じる生徒が67.4%とそこまで高くはないと見取れるように、学習に取り組む姿勢がまだまだ受け身である生徒が多いのが課題である。	最終学年を迎えるにあたり、まずは自分の意志で進路目標を決定し、それを実現するための覚悟をしっかりと持たせたい。そのために、生徒個々に合わせた丁寧な進路指導を継続していく。	多様な生徒を理解し、進路指導をはじめとする丁寧な対応が求められる。
(13) 3学年	「探究科1期生」としての自己の在り方と他者との関わりの中で一人一人がどのような進路実現をしていくのか考え実現する取り組みを行う。	進路実現目標に向かい自らの意思で主体的に行動できるよう情報提供、面談等を行い、生徒に対する学校生活に関するアンケートにおいて、満足度が70%以上でA、50%以下でC。【1-②】【2-①】【3-②】	A	学校生活に関する生徒アンケートの学年平均値は84.8%となり、満足度は高い。「自分・他者の人権を大切にしよう」と発言・行動しなければいけないと思う」の項目は97.9%あり、「時間や身だしなみについて自律的に判断して行動している」の項目も95.9%と極めて高い評価だった。他者への思いやりと自己判断ができている傾向が読み取れる。「本校に入学してよかったと思う」の数値も91.8%あり、学校生活への満足度が高い状況が読み取れる。	左の通り、定量目標は達成しているものの、改善の余地は残っている。特に、生徒に「わかった」「できた」という感覚をいかに抱かせるかは学習の動機付けとして重要視すべきである。方策として、指導事項・評価項目・学習活動を明示した具体的な年間指導計画の策定を順次進めたい。これにより、指導者と学習者が3年間の見通しをもつとともに、指導事項・学習活動と評価を一体として捉えることが容易となり、少しずつ改善が可能となるだろう。	多様な生徒にきめ細やかに対応し、進路実現に繋がったことは評価できる。効果的だった取組は2期生以降に繋げていく必要がある。
国語	より良い評価方法(観点別学習状況評価)の確立と授業改善	観点別学習状況評価について研究・実践し、生徒一人一人の実態に応じたきめ細かい指導を目指す。生徒の授業アンケートの設問「この授業で「わかった」「できた」と思う」で肯定的回答の割合が70%以上でA、50%以下でC。【4-①】	A	授業アンケート設問への肯定的な回答割合は約92%であった。ただし、肯定的回答の内訳は「よく当てはまる」が43.7%、「やや当てはまる」が6.3%となっていることから、さらなる改善の余地や伸び代が残っていると捉えられる。		生徒に「わかった」「できた」という感覚を抱かせ学習の動機付けとしての評価できる。3年間の見通しを持った指導計画の詳細を再検討し策定する必要がある。
	言語感覚を磨き、国語で的確に理解し効果的に表現する資質・能力を育成する。	探究学習等に必要で、基礎的な国語の知識・技能とともに、国語を用いて思考し判断し表現する力を身に付け、ICT教材等を活用してそれを活用させる授業を実践する。生徒の授業アンケートの設問「この授業はわかりやすい授業である」が70%以上でA、50%以下でC。【2-①】	A	授業アンケート設問への肯定的な回答割合は約95%であった。また、肯定的回答の内訳は「よく当てはまる」が64.0%、「やや当てはまる」が35.4%となっていることから、多くの生徒の実態や能力に応じた効果的な授業展開ができていると評価できる。		
地歴	より良い評価方法(観点別学習状況評価)の確立と授業改善	観点別学習状況評価について研究・実践し、生徒一人一人の実態に応じたきめ細かい指導を目指す。生徒の授業アンケートの設問「この授業で「わかった」「できた」と思う」で肯定的回答の割合が70%以上でA、50%以下でC。【4-①】	A	授業アンケート設問への肯定的な回答割合は約85%であった。ただし、肯定的回答の内訳は「よく当てはまる」が43.3%、「やや当てはまる」が42.2%となっていることから、さらなる改善の余地や伸び代が残っていると捉えられる。	地歴教科に対する興味関心を高校までに培ったベースに頼りすぎず、高校生としての新たな取り組みを学校として考え伸ばしていきたい。世界遺産検定や世界遺産教室実施の継続と授業への反映を図っていくたい。	世界遺産検定等の取組を取り入れ地歴・歴史への興味・関心を高めようとしていることは評価できている。さらなる授業改善が求められる。
	地理的・歴史的な見方・考え方を身につけ課題を追求する活動を通して、広い視野に立ち国際社会に主体的に生きる資質・能力を育成する。	基本的な地理的・歴史の知識を身につけた上で、事象を分析、理解する学習活動を行う。高大連携を見据えた実地実践的な取り組みを行い、視野を広げ探究的な考察力を身につける授業を実践する。生徒の授業アンケート設問「自分にとって分かりやすい授業である」で肯定的回答の割合が70%以上でA、50%以下でC。【1-②】【2-①】	A	授業アンケート設問への肯定的な回答割合は約90%であった。地歴科の中で比較すると、「よく当てはまる」の数値に教科によって35%～55%の大きな振り幅があり、授業の取り組みや教員側のアプローチで差がみられる。		
公民	より良い評価方法(観点別学習状況評価)の確立と授業改善	観点別学習状況評価について研究・実践し、生徒一人一人の実態に応じたきめ細かい指導を目指す。生徒の授業アンケートの設問「この授業で「わかった」「できた」と思う」で肯定的回答の割合が70%以上でA、50%以下でC。【4-①】	A	授業アンケートの結果はどの科目も肯定的な回答が9割前後になった。よって、当初の目標は達成できたと考えている。特に3年生の公民科特論では、1年次に公共で政治分野の学習を終えていたので、経済分野の学習に重点化でき、結果的に理解をより深めることにつながったと考えている。	1年次と3年次に公民科を学習するという特性上、1年のプランクを埋めつつ理解をスムーズに深める工夫が必要だった。科目こそ違おうが、共有する分野が多い公民科特論(政治経済)と公共だからこそ、両科目を見通しながら政治と経済の分野の調整を図ることで理解の深まりを促すことができ、それが3年次の大学入試の結果にもつながったと考えている。	3年生の公民科特論と1年の公共の繋がりを意識した授業展開は評価できる。次年度もさらに研究を進め生徒の理解が深まるよう工夫する必要がある。
	主権者としての知識や心構えを理解し、答えのない課題に対し、最適解を提示できる論理的思考力を育成する。	基本的な社会の諸制度や課題、文化、歴史、経済論理などを理解し、社会の諸問題に対し、様々な角度から考察を行い、それらの課題に対する最適解を論理的に導きだせるよう、探究的な活動を伴う授業を展開する。生徒の授業アンケート設問「自分にとって分かりやすい授業である」で肯定的回答の割合が70%以上でA、50%以下でC。【2-①】	A	授業アンケートの結果はどの科目も肯定的な回答が9割前後だった。よって、当初の目標は達成できたと考えている。3年生の公民科特論と1年の公共で政治分野と経済分野にそれぞれ重点化することで理解が深まりやすくなり授業展開になったと考えている。		
数学	より良い評価方法(観点別学習状況評価)の確立と授業改善	観点別学習状況評価について研究・実践し、生徒一人一人の実態に応じたきめ細かい指導を目指す。生徒の授業アンケートの設問「この授業で「わかった」「できた」と思う」で肯定的回答の割合が70%以上でA、50%以下でC。【4-①】	A	長期休暇、大型連休明けには課題や單元テストを実施し、学習内容の定着と理解度の向上を行った。全クラスで共通のプリントを行う際は、担当者間で確認しどの観点の評価にいれるかを明確にした。授業アンケートでの観点別学習状況評価は「とてもそう思う」「そう思う」を合わせて83.8%であった。	生徒の理解度の差が大きく、授業内容やテストの作問にはさらなる工夫が必要である。それぞれの生徒に合った課題や取り組みを考えていく必要がある。共通テストに向けた対策、生徒たちの興味関心につながる教材の工夫を教員間で分担、連携して行っていく。	グループワーク等で生徒自身が理解度を認識できることも評価できる。今後も生徒の理解度に見合った教材の工夫を進め丁寧なケアを行うことが求められる。
	数学的な見方や考え方を認識し、数学の美しさ・おもしろさを感じられる生徒を育成する。	身の回りの現象を数学的に捉えた題材を取り入れるなど、興味・関心をもたせる授業を行う。また、ICT機器を活用して、それらの現象を体験し、協働で問題解決を行う課題探究型の授業を実践する。生徒の授業アンケートでの「興味・関心が高まる」の設問の満足度が70%以上でA、50%以下でC。【1-②】【2-②】	A	1・2年の授業を中心に課題学習を行った。教材の工夫や難易度の調整が必要である。グループワークについては、各班で協力する姿勢が見られた。授業アンケートでの授業方法に関する満足度は「とてもそう思う」「そう思う」を合わせて80.2%であった。		

	具体的目標	具体的方策・評価指標【】の番号は重点目標-具体的目標に対応する	自己評価結果	成果と課題(評価結果の分析)	改善方策等	学校関係者評価(結果・分析)及び改善方
物理	より良い評価方法(観点別学習状況評価)の確立と授業改善	観点別学習状況評価について研究・実践し、生徒一人一人の実態に応じたきめ細かい指導を目指す。生徒の授業アンケートの設問「この授業で「良かった」できた」と思う」で肯定的回答の割合が70%以上でA、50%以下でC。【4-①】	A	力学では体系的を意識し、熱分野では熱と仕事が続くよう意識して講義・演習を行い、生徒一人一人の取り組みに対してきめ細やかな指導を行った。生徒の授業アンケートの結果、「この授業で良かった」「できた」と思うで「とてもそう思う」「そう思う」を合わせた割合は84%であった。	文字式の計算等、理系教科の苦手な生徒へのフォローが不十分であった。授業内の演習等で生徒への個別最適化の対応を考えていく必要がある。課題を工夫して、家庭での学習を促す必要がある。	数多く実験を設定し物理現象の理解を深める取組は評価できる。物理が苦手な生徒にも興味・関心が高まるような工夫が必要である。
	物理現象に対する思考力を育成する。	身の回りの物理現象を理解し、興味・関心を引き出す授業を行う。ICT機器を活用して、協働で問題解決を行う指導を目指す。生徒の授業アンケートでの「興味・関心が高まる」の設問の満足度が70%以上でA、50%以下でC。【1-②】【2-②】	A	各单元ごとに極力実験を行い、その実験を通して物理現象に対する興味・関心をもたせる授業を行った。生徒の授業アンケート、「興味・関心が高まる」の満足度は84%であった。		
化学	より良い評価方法(観点別学習状況評価)の確立と授業改善	観点別学習状況評価について研究・実践し、生徒一人一人の実態に応じたきめ細かい指導を目指す。生徒の授業アンケートの設問「この授業で「良かった」できた」と思う」で肯定的回答の割合が70%以上でA、50%以下でC。【4-①】	B	小テスト・補習をこまめに行い、生徒一人一人の取り組みに対してきめ細やかな指導を行った。生徒の授業アンケートの結果、「この授業で良かった」「できた」と思うで「とてもそう思う」「そう思う」を合わせた割合は69%であった。	計算等、理系教科が苦手な生徒と将来理系大学への進学を希望する生徒への個別最適化の方策を考えていくことが課題である。授業で取り組み内容を精選し、講座等で発展的な内容を補えるように工夫したい。	化学が苦手な生徒に対し補習等で補っていることは評価できる。今後も生徒の大学への進路希望に沿ったきめ細かい教科指導が必要である。
	生活に関連する化学的知識を基に科学的に思考できる能力を育成する	身の回りの現象を化学的に捉えた題材を取り入れる。実験を通して、興味・関心をもたせる授業を行う。ICT機器を活用して、それらの現象を体験し、協働で問題解決を行う課題探究型の授業を実施する。生徒の授業アンケートでの「興味・関心が高まる」の設問の満足度が70%以上でA、50%以下でC。【1-②】【2-②】	A	多くの実験を通して、興味・関心をもたせる授業を行った。生徒の授業アンケート、「興味・関心が高まる」の満足度は80%であった。		
生物	より良い評価方法(観点別学習状況評価)の確立と授業改善	観点別学習状況評価について研究・実践し、生徒一人一人の実態に応じたきめ細かい指導を目指す。生徒の授業アンケートの設問「この授業で「良かった」できた」と思う」で肯定的回答の割合が70%以上でA、50%以下でC。【4-①】	A	テストや成果物がどの観点に該当するかを明確に伝えることができた。授業アンケートやコメントシートを活用して、生徒一人一人の取り組みに対してきめ細やかな指導を行った。生徒の授業アンケートの結果、「とてもそう思う」「そう思う」を合わせた割合は90%以上であった。	生物を学ぶ目的が多様で意欲に差があるため、それぞれのニーズを満たす方策を考えていくことが課題である。具体的には次の2点を重点的に取り組む。 ・授業アンケート等を利用して意識調査とそれに伴った授業内容の改善 ・講座等による発展的な学習機会の提供	電子黒板等を活用するなどの内容理解のための工夫は評価できる。授業アンケートを利用した意識調査を踏まえた授業改善が求められる。
	科学的思考力・表現力を育成する	観察実験を通して、興味・関心を引き出し思考力を養う授業を行う。ICT機器を活用し、協働で問題解決を行う課題探究型の授業を実施する。生徒の授業アンケートでの「わかりやすい授業である」の設問の満足度が70%以上でA、50%以下でC。【1-②】【2-②】	A	ほぼ全ての授業で電子黒板を用いた。3年生生物の授業では月1回以上の頻度で実験を行い、自らテーマを設定し実験方法を考える方式も取り入れた。生徒の授業アンケートの結果、「分かりやすい授業である」の満足度の割合は90%以上であった。		
英語	より良い評価方法(観点別学習状況評価)の確立と授業改善	観点別学習状況評価について研究・実践し、生徒一人一人の実態に応じたきめ細かい指導を目指す。生徒の授業アンケートの設問「この授業で「良かった」できた」と思う」で肯定的回答の割合が70%以上でA、50%以下でC。【4-①】	A	年間通して42回の単語テストを全学年オンライン上で実施した。プリントでのフォローや、長期休暇明けには紙面での単語テストも実施した。また、文法テストを2年生は19回、3年生は7回実施した。共通テストや国公立二次に向けてレベルの高い内容に加え、ICTを活用し、個に応じた基礎的なフォロワーもっている。授業アンケートでの肯定的評価は88%であった。	・3年生は受験を見据えレベルの高い問題を多く扱っており、理解度合いが他学年と比べると低い傾向にあった。基礎的な内容を着実に理解した上で進級できるように、指導方法や支援体制を見直していく。 ・Can-doリストを教員用にも改編し、生徒に期待するレベルを設定することで共通課題を図る。 ・ICT及びAIを活用した最適な授業展開を検討し続ける。	オンライン英会話では英語の運用能力だけでなく情報発信できる態度も育成できている。また、平素の授業だけでなく、検定への対策など様々な工夫を期待する生徒に評価できることは評価できる。今後これらを継続して実施することが求められる。
	相手の伝えたいことを的確に理解し、自分の思いを適切に伝える英語運用能力を育成する。身につけた英語運用能力を国際的な視野をもって探究活動へ応用できるようにする。	英語という特性を活用して、社会問題や時事問題等、様々な分野の題材を取り入れる。言語の使用を通して、興味・関心をもたせる授業を行う。ICT機器を活用して、それらの現象を体験し、協働で問題解決を図る課題探究型の授業を実施する。生徒の授業アンケートでの「興味・関心が高まる」の設問の満足度が70%以上でA、50%以下でC。【1-②】【2-②】	A	オンライン英会話を5回実施して、英語力とコミュニケーション力の向上に努めた。また、ペアワークやグループワーク等の活動を実施することで、生徒同士の協働の場を提供し、相互の能力向上を期待した。英語のニュースサイトを多用して、英語力の向上だけではなく、様々な知識を得られるように、授業内から授業外の取り組みにつながるようにも声掛けを行っている。授業アンケートでの肯定的評価は85%であった。		
家庭	より良い評価方法(観点別学習状況評価)の確立と授業改善	観点別学習状況評価について研究・実践し、生徒一人一人の実態に応じたきめ細かい指導を目指す。生徒の授業アンケートの設問「この授業で「良かった」できた」と思う」で肯定的回答の割合が70%以上でA、50%以下でC。【4-①】	A	実習においては説明動画を作成し、生徒が理解できるまで確認し確認できるように工夫した。授業の取り組みや提出物の作成の仕方などきめ細かい指導を行った。授業アンケートの設問「この授業で「良かった」できた」と思う」で肯定的回答の割合が90%であった。	・実習と講義で、生徒の興味・意欲に差があると感じるので、講義内容でも生徒が興味・関心をもてる内容を研究し、主体的な学習活動を実施していく。	実習では説明動画を作成するなど工夫が見られる。講義形式の授業の改善と評価についての研究が求められる。
	家庭や地域社会における生活の中から課題を見つけ、生涯を見通して生活の課題を解決する力を育成する。	家庭や社会における生活の中にある課題に気づかせ、解決にむけて学習活動を実践する。生徒の授業アンケートの設問「この授業で「興味関心が高まる」で」肯定的回答の割合が70%以上でA、50%以下でC。【1-②】【2-②】	A	各分野において、現代社会における生活課題を投げかけ、生徒たちに考える機会を与えるようにした。生徒の授業アンケートの設問「この授業で「興味関心が高まる」で」肯定的回答の割合が84%であった。		
保健体育	より良い評価方法(観点別学習状況評価)の確立と授業改善	観点別学習状況評価について研究・実践し、生徒一人一人の実態に応じたきめ細かい指導を目指す。生徒の授業アンケートの設問「この授業で「良かった」できた」と思う」で肯定的回答の割合が70%以上でA、50%以下でC。【4-①】	A	教科書の内容だけでなく、保健体育の分野で、生徒の実生活に活かせる内容を画しながら、レポート課題・実技課題の作成を実施した。目的を明確にし、授業内容の工夫を行った。外部講師を招聘して「認知症サポーター養成講座」を実施することができた。授業アンケートによる観点別学習状況に関する理解度は92%であった。	・3年間を通しての授業展開を踏まえ、つながりのある授業を目指して、内容を精査していく。 ・保健体育の分野だけでなく、他教科との関連を考慮し、生徒の興味・関心、進路に関する関わりを見据えながら授業を展開していく。	生徒の授業方法に関する満足度は高い。今後は他教科との関連や3年間を通した授業展開の研究をさらに進めることが求められる。
	生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを継続するための資質・能力を育成する。	体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題を発見し、合理的、計画的な解決に向けた学習過程を通して、ICT機器の活用や、課題探究型の授業を実施する。生徒の授業アンケートの設問「この授業で興味関心が高まる」で肯定的回答の割合が70%以上でA、50%以下でC。【1-②】【2-②】	A	ICTの活用や課題探究型の授業の観点から、自ら目標を定め、課題解決をし、主体的に取り組めるような授業展開を行った。授業アンケートにおける授業方法に関する満足度は90%であった。		
情報	より良い評価方法(観点別学習状況評価)の確立と授業改善	観点別学習状況評価について研究・実践し、生徒一人一人の実態に応じたきめ細かい指導を目指す。生徒の授業アンケートの設問「この授業で「良かった」できた」と思う」で肯定的回答の割合が70%以上でA、50%以下でC。【4-①】	A	プリントやteams、life is tech レッスンを利用して、観点別評価を行った。教科書の内容を2年生の12月までにほぼ終えて、2年生の1月からは共通テストに向けた模擬問題を扱った。グループワークで生徒同士で教えあひながら、主体的に取り組んでくれた。授業アンケートによる観点別学習状況に関する理解度は93%であった。	今年度は、「情報I」の初めての共通テストが実施された。本校生徒で高得点を取ってくれた生徒もいたが、全国平均には少し届かなかった。次年度以降は共通テストも難化する予想されているので、対策問題等も積極的に授業で扱い、模試の受験案内も行ってきたい。授業アンケートにおける興味・関心に関する満足度は83%であった。	Pythonのプログラミング実習の授業で生徒が主体的に取り組む、満足度も非常に高い。「情報I」の共通テスト対策についてさらなる研究が必要である。
	現代社会における情報の重要性を理解し、プログラミング等の情報技術を問題解決につなげる思考力を育成する。	ICT機器を積極的に活用し、興味関心を持たせる授業を展開する。複数のプログラミング教材を協同で使い、トライ&エラーを繰り返してプログラミングを活用しての問題解決を学ぶ授業を実施する。生徒の授業アンケートの設問「この授業で興味関心が高まる」で肯定的回答の割合が70%以上でA、50%以下でC。【1-②】【2-②】	A	2年生ではlife is tech レッスンを利用して、pythonのプログラミングの実習、1年生ではScratch&ExcelのVBAでのプログラミング実習を行った。他の授業でもICTを積極的に活用し、生徒に興味・関心をもってもらった授業を心掛けた。授業アンケートにおける授業方法に関する満足度は83%であった。		
課題探究	探究科の核となる「課題探究」の全体像を踏まえた授業の改善と実践	生徒が自らの在り方生き方を考えながら、主体的に課題設定する力を育成するための授業を、不断の見直しを通して計画・実施し、生徒の学びを支援する。課題探究に関する資料を10回以上提供してA、提供が5回以下の場合C。【1-②】	A	資料の提供回数は12回であり、一応必要な資料は提供していた。しかし、大半がweb上での連絡となり実際の打合せや研修を行えなかったこと、また、時間的に余裕をもった展開ができなかったことを踏まえ、内容的に十分だったとは言えない。	各担当者による創意工夫も踏まえて、生徒は熱心に学習に取り組むことができていた。特に効果的に進められた事例を、フォーラムなどの機会でも共有することはもちろんだが、実際の指導の進め方も事例研究として共有していくことが、取組を継続的に発展させていく上で必要だと考える。	今年度の取組の成果を生かして、来年度も生徒が主体となる探究活動を大学教員も含め全教職員でサポートしていく必要がある。
	各教科や課外での学習成果を踏まえた幅広い視野をもち、実社会や実生活における複雑な文脈の中に存在する課題を発見し、それを解決に導く力を育成する。	学校外での活動、研修、大会への参加や、ICTを活用した授業への取組を積極的に実践する。生徒の授業アンケートでの「課題探究の実践内容に関する満足度(授業アンケートで「良かった」/「できた」/「興味関心が高まった」の指標の平均)が70%以上でA、50%以下でC。【2-①】	A	生徒がアンケートで「良かった」/「できた」/「興味関心が高まった」と回答する生徒の割合は平均で89.0%であり、水準に達している。「意欲的に取り組んだ」に対する回答も91.6%と高く、生徒が熱心に課題探究に取り組んだことが分かる。		